

参画型ボランティア活動を活かした中学生の社会参画 ～特別活動で培った力を基盤にした取り組み～

藤原靖浩

(大阪市立大学)

【要旨】

本研究の目的は、中学生の社会参画の意識を高めるために必要な特別活動の重要性について述べ、中学生の社会参画の意識を高め、地域とのつながりを深めるための方法として、参画型ボランティア活動を提案し、実践事例を踏まえてその効果を検証することにある。中学生が特別活動で培った力を基盤にして、地域社会の中で活躍することで、中学生の頃から地域社会とのつながりを深め、地域社会に貢献する社会参画の意識を高めることができると考えられる。

1.問題と目的

兵庫県の公立中学校では、中学2年次に「トライやる・ウィーク」¹⁾と呼ばれる職場体験を実施している。中学生は、5日間の体験活動を通して、地域社会にあるさまざまな職場で働くことの意義や楽しさを実感し、社会の一員としての自覚を育んでいる。このような社会体験活動は、日本全国で実施されており²⁾、学校全体や部活動による地域清掃やあいさつ運動など、学校教育では中学生が社会と触れ合う機会を準備している。このような活動は、特別活動や総合的な学習の時間を中心に実施され、中学生の社会参画への意識を高め、主体性や自主性を育むことを目的としている。しかしながら、これまでに実施されてきた社会体験活動では、中学生は学校が準備した場所へ行き、活動に参加するだけに留まっており、中学生の主体性や自発性が十分に育まれているとは言い難い。さらに、中学生は高校生になると通学や部活動によって自分の住んでいる地域社会から離れ、地域とのつながりが薄れてしまうことも少なくない。それゆえに、中学生の頃から地域社会とのつながりを深め、地域社会に貢献する社会参画の意識を高める必要がある。

以上の点を踏まえて、本論文の目的は、これからの地域社会の担い手となるべき中学生に焦点を当て、彼らが特別活動で培ってきた話し合い活動の力等を活かす実践の場を地域社会の中に準備することを試みた参画型ボランティア活動の実践を取り上げ、その中で、中学生が地域とのつながりを実感することで、地域に貢献する意識や郷土愛をどのように高めることができたかについて明らかにすることにある。

2.中学生の社会参画と特別活動

教育基本法第2条5項では、教育の目標の一つとして、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」ことが必要であると示されている。ここで述べる「郷土を愛する」ことは、地域とのつながりを深め、社会と触れ合うことによって達成される。学校は、この目的に即して、子どもの郷土を愛する気持ち（郷土愛）を育むために、さまざまな取り組みを行っている。特に、本研究が対象とする中学生にとって、社会とのつながりを身近に感じることができるのは特別活動であり、中学生の社会参画において特別活動の果たす役割は大きい。

中学校学習指導要領第5章第1によれば、特別活動は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことを目標としており、学級活動や生徒会活動などを通して、望ましい集団づくりや個人的・社会的な資質の育成を行っている。特に、生徒会活動では「ボランティア活動などの社会参加」を行うことが示されている。『中学校学習指導要領解説 特別活動編』では、具体的な内容として、地域の福祉施設や社会教育施設などでのボランティア活動や地域で行われる文化・スポーツ行事、防災や交通安全の活動などに参加することが挙げられている³⁾。しかしながら、現在学校で行われている特別活動は、各活動が独立しており、継続的に活動に取り組む中で、子どもの社会参画の意識を高め、主体性や自発性を高めることが困難である。この意味において、現在の地域社会には、子どもが特別活動で育んだ資質や能力を実際の社会参画の場面で生かすことのできる機会を保証することが必要である。また、特

別活動の目的に示されている通り、各活動では、よりよい人間関係の構築や自ら進んで学級や学校の問題を解決する態度を育てる教育活動という特質がある。

このように見ると、中学生の社会参画には、中学生自身が郷土愛を育み、地域社会の一員として、地域社会に貢献しようとする意識を高めることが必要である。このような問題意識に基づいて、本研究では中学生の社会参画について述べる。

(1) ボランティア活動による社会参画

特別活動は、学校内外において積極的に行われるべきであり、地域社会の活動と連続していることが理想的である。中学校学習指導要領第5章第2では、特別活動としての学校行事に「勤労生産・奉仕的行事」を掲げ、そのねらいとして、「勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと」が示されている。また、『中学校学習指導要領解説 特別活動編』では、学校が関係機関、ボランティア団体と積極的に連携することの必要性についても指摘されている。本研究では、ボランティア活動を子どもが主体的、自発的に取り組む活動として捉え、学校教育で育んだ力を実際に活かすことのできる地域社会におけるボランティア活動こそが、社会参画の意識を高め、子どもの主体性や自発性を育む効果的な活動であると考ええる。

(2) ボランティア活動研究の動向

現在、ボランティア活動は、日本国内外を問わず、幅広い分野で行われている。中でも、中学生・高校生を対象としたボランティア活動は子どもの人間関係づくりの能力や自主的、実践的な態度を育てるとして注目されている。「ボランティア元年」とも呼ばれる阪神淡路大震災が起こった1995年以降、ボランティア活動に対する社会の人々のまなざしは大きく変化し、若い世代のボランティア活動への積極的参加は、就職活動などにおいても重要視される傾向になっている。

ところで、現在行われているボランティア活動に関する研究において、中学生を研究対象としたものは、そのほとんどが学校単位で行われたボランティア活動において、その有用性について述べたものである。しかしながら、特別活動に関係が深い学校教育法（2007年改正）の第21条では、義務教育の目標として「一 学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、

公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が掲げられ、学校外における社会的活動にも力を入れなければならないことが示されている。特に、これまで研究対象とされてきた地域社会におけるボランティア活動は、学校や大人が計画し、準備を終えたところに、中学生が参加するものであり、主体的かつ自発的に自らボランティア活動の場を求める形では行われてこなかった。ここには、中学生が平日・休日問わず部活動によって時間的な制限を受けているため、計画や準備に十分に関わることができないという問題があった。これゆえに、中学生の学校外におけるボランティア活動への参画の機会は少なく、また実践記録以上の研究対象として捉えることが困難であったと思われるのである。

(3)参画型ボランティア活動の必要性

中学生が主体的かつ自発的に社会参画を行う方法の1つとして、本論文では参画型ボランティア活動を提案する。参画型ボランティア活動では、子どもたちが地域のさまざまな活動に企画段階から加わり、話し合い活動を通して活動を自主的に計画することで、子どもの主体性を育み、社会の一員として求められる力（コミュニケーション能力、企画力、課題発見力、人間関係調整力など）を身に付けることを意図している。なお、ここでいう参画とは、ア）子ども自身で活動を企画・実行する、イ）活動の内容を決定する話し合い活動を重視する、ウ）活動ごとに振り返りを行い子どもの資質・能力を育み高める施策を行う、エ）子どもの将来の進路や職業に影響を与える体験や経験をすることができるという4点を重視した活動のことである。

地域社会は、子どもが特別活動を通して育んださまざまな資質や能力をさらに高めると共に、学校教育とつながりをもった活動の場、すなわち、特別活動で育んだ資質や能力を実際に発揮することのできる場をボランティア活動などの機会を通して、子どもたちに提供することが求められている。参画型ボランティア活動は、従来までの参加型のボランティアと異なり、子どもが学校外のボランティア活動を経験し、ボランティア活動を企画段階から実施、運営、振り返りなどを行うことで地域社会とのつながりを深め、社会参画の意識を高める機会を提供することができる。なお、本研究では参画型ボランティア活動を特別活動で育んだ資質や能力を発揮するための場として活用できる、特別活動の延長線上にある

活動の1つとして捉えている。

3.中学生の社会参画の実践事例

参画型ボランティア活動は、子どもがボランティア活動に参画することで、学校や地域社会にある問題を自分たちで発見し、ボランティア活動それ自体を計画・実行することを通して、子どもの主体性や自発性を育み、社会の一員として成長する機会を提供するものである。このような参画型ボランティア活動は、既出の学校教育における特別活動の目標に類似する点が多い。そこで筆者は参画型ボランティア活動を子どもが特別活動で育んだ資質や能力を実際の活動の中で発揮する場として、学校教育の延長線上にある活動として捉える。

(1)対象地域

地域社会で行われるボランティア活動は、対象となる地域社会の地域性と独自性を十分に理解した上で、その地域社会にあった活動が行われなければならない。実践事例の対象地域である兵庫県神戸市北区唐櫃台地区は、六甲山の中腹にあり、山を1つ挟んで観光地である有馬温泉と並立している。同じ地区内に公立の幼小中高および児童館、保育所があり、中学校までの間は児童生徒も持ち上がりで、引っ越しや転勤などの事情が無ければ、他の地区から子どもが入って来ないという昔ながらの地域性をもった場所である。大都市圏から離れた場所であり、未だに昔ながらの生活を残している地区であると言える。このような地区において、参画型ボランティア活動を実践することは、日本にある他のこのような地域にとって参考となるモデルを示すことができると考えられる。

唐櫃台地区は、ここ10数年の間に高齢化や地域住民による地域貢献の減少によって、夏祭りの中止や他の地域行事の規模の縮小など、これまで地域全体で取り組んできた活動が失われている。このような現状を鑑み、筆者は学校と地域社会を連携できる活動として、2010年から参画型ボランティア活動の実践を提案した。唐櫃台地区における3年間の参画型ボランティア活動の実践を通して、筆者は、唐櫃台地区の住民に参画型ボランティア活動の重要性を示すため、地区内の中学生・高校生・大学生を中心に地域活動への参画を実践してきた。この実戦経験を踏まえ、2013年より、中学校との積極的な連携を目指した。

(2)実践内容

中学校との連携を実現するために、筆者および活動の中心的な役割を担う大学

生が、地元の中学校と交渉を行い。学校長の指導の下、生徒会執行部と複数回に渡る話し合いを行った。そこでは参画型ボランティア活動の内容および効果を説明し、中学生の自発的なボランティア活動への参画を啓発した。2013 年 1 月から生徒会執行部との話し合いを行い、2013 年 6 月には代表者が地域の会議へ出向き、学校で行われている活動や今後のボランティア活動への取り組みについて説明した。中学校との全面的な連携の取り組みとして、2013 年 11 月に実施される地域活動である「からとの子どもたちの芸術祭」⁴⁾ を目標として設定し、学校全体に参画型ボランティア活動に加わりたいメンバーを募集した。本事例において、中学生は実行委員会の一員として活動の企画・運営について話し合い活動を行った。実行委員会は高校生、大学生、地域の諸団体の長、学校関係者など計 15 名で構成され、活動当日までの準備として、「からとの子どもたちの芸術祭」のプログラムの作成、チラシ・ポスターの作成と配布、自治会・学校園への協力要請と地域の諸団体の会議での広報、会場内のレイアウトの作成と会場となる高校との打ち合わせ、幕間のイベントの企画等を行った。中学生は、プログラムの作成、幕間のイベントの企画、チラシ・ポスターの作成、地域の諸団体の会議への参加と広報等を担当し、実際に地域の人々や高校生・大学生と協力して活動した。

(3)事例と評価

本研究では、参画型ボランティア活動を通して、中学生が地域とのつながりを深め、郷土を愛する気持ちを育んだことを実証的に示すため、「話し合いに関するアンケート調査（改訂版）」を用いて、話し合い活動の度に振り返りとして記入してもらった。質問内容は、『特別活動における発達課題と評価についての研究』⁵⁾ で使用された質問紙を基に「Q1 話し合い活動」「Q2 集団活動」「Q3 評価・振り返り」「Q4-1～4 自尊感情」「Q4-5～9 共感性」「Q5-1,2,5,9,10 集団満足感」「Q5-3,4,6,7,8 集団参与」「Q6-1～5 郷土愛」「Q6-6～10 地域貢献」まで、計 51 個を作成した。また、各質問項目は、4 段階評定（「できる（3 点）」「まあまあできる（2 点）」「あまりできない（1 点）」「できない（0 点）」）で回答を求めた。結果はすべて単純集計で算出している。

さらに、アンケートの結果を踏まえて、中学生のボランティア参加者を対象に活動の反省を含めた 1 人 10 分～15 分程度の聞き取り調査を実施した。

話し合いに関するアンケート調査		
Q1 話し合い活動		Q4 1～4 自尊感情
Q1-1: 私は、話し合いで意見を述べて、つなぐことができる。	Q4-1: 私は、よいところがある。	Q4-5: 私は、やる気になれば、だいたいことはできると思います。
Q1-2: 私は、みんなの前で意見を述べて、つなぐことができる。	Q4-2: 私は、自分のことを大切に思っています。	Q4-6: 私は、疲れている人を見ると、優しい気持ちになります。
Q1-3: 私は、他の人の意見をきくと、聞くことができます。	Q4-3: 私は、人の役に立っていると思います。	Q4-7: 私は、困っている人を見ると、助けたくなります。
Q1-4: 私は、他の人の意見を大切にすることができます。	Q4-4: 私は、自信をもってやれることがあります。	Q4-8: 私は、楽しそうな人を見ると、楽しい気持ちになります。
Q1-5: 私は、他の人の意見に自分の意見を添えて、つなぐことができます。	Q4-5: 私は、やる気になれば、だいたいことはできると思います。	Q4-9: 私は、自信のなさそうな人を見ると、ほげまそうという気持ちになります。
Q1-6: 私は、話し合いで自分の意見を述べて、つなぐことができます。	Q4-6: 私は、疲れている人を見ると、優しい気持ちになります。	Q4-10: 私は、得意な夢や目標について考えています。
Q1-7: 私は、話し合いで自分の意見を述べて、つなぐことができます。	Q4-7: 私は、困っている人を見ると、助けたくなります。	Q4-11: 私は、自分のことが好きではありません。
Q1-8: 私は、あとで他の人が読んでくれるように記録することができます。	Q4-8: 私は、楽しそうな人を見ると、楽しい気持ちになります。	Q5 1.2.5.9.10 集団満足感
Q1-9: 私は、話し合いの大切なことや意見を大切にすることができます。	Q4-9: 私は、自信のなさそうな人を見ると、ほげまそうという気持ちになります。	Q5-1: 私のグループには、よいところがあります。
Q2 集団活動	Q4-10: 私は、得意な夢や目標について考えています。	Q5-2: 私は、自分のグループが好きです。
Q2-1: 私は、学年が違っても人と活動することができます。	Q4-11: 私は、自分のことが好きではありません。	Q5-3: 私のグループには、楽しいところがあります。
Q2-2: 私は、みんなで決めたルール（きまり）を実行することができます。	Q5 1.2.5.9.10 集団満足感	Q5-4: 私は、困っているときグループの人に助けを求めます。
Q2-3: 私は、活動のときにみんなをまとめて活動することができます。	Q5-1: 私のグループには、よいところがあります。	Q5-5: 私は、グループの困っている人を助けあげることができます。
Q2-4: 私は、必要に応じて人に頼むことができます。	Q5-2: 私は、自分のグループが好きです。	Q5-6: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。
Q2-5: 私は、リーダーの人の助けを借りて活動することができます。	Q5-3: 私のグループには、楽しいところがあります。	Q5-7: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。
Q2-6: 私は、決まりや時間を守って活動することができます。	Q5-4: 私は、困っているときグループの人に助けを求めます。	Q5-8: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。
Q2-7: 私は、だれとでも分け隔てなく活動することができます。	Q5-5: 私は、グループの困っている人を助けあげることができます。	Q5-9: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。
Q2-8: 私は、みんなと同じ目標に向けて努力することができます。	Q5-6: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。	Q5-10: 私は、いつでもこのグループが助けを求めたいと思っています。
Q2-9: 私は、うまくいって活動に取り組むことができます。	Q5-7: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。	Q5-11: 私は、いつでもこのグループが助けを求めたいと思っています。
Q2-10: 私は、男女だれでも仲良くすることができます。	Q5-8: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。	Q6 1～5 郷土愛
Q2-11: 私は、自分の役割（当番）を最後までやり遂げることができます。	Q5-9: 私は、グループでいろいろなことを楽しむことができます。	Q6-1: 私の地域には、よいところがあります。
Q3 仲間・協力関係	Q5-10: 私は、いつでもこのグループが助けを求めたいと思っています。	Q6-2: 私は、自分の住んでいる地域が好きです。
Q3-1: 私は、集団の一員として行動することができます。	Q5-11: 私は、いつでもこのグループが助けを求めたいと思っています。	Q6-3: 私の地域には、楽しいところがあります。
Q3-2: 私は、みんなのために発言することができます。	Q6 1～5 郷土愛	Q6-4: 私は、地域の行事に参加することが楽しみです。
Q3-3: 私は、みんなのために行動することができます。	Q6-1: 私の地域には、よいところがあります。	Q6-5: 私は、いつでもこの地域にいたいと思っています。
Q3-4: 私は、後片付けをすることができます。	Q6-2: 私は、自分の住んでいる地域が好きです。	Q6-6: 私は、地域の役に立ちたい（地域に貢献したい）と思っています。
Q3-5: 私は、うまくいかなかったことも受け入れることができます。	Q6-3: 私の地域には、楽しいところがあります。	Q6-7: 私は、地域の役に立っている（地域に貢献している）と思っています。
Q3-6: 私は、活動を振り返って次の活動に生かすことができます。	Q6-4: 私は、地域の行事に参加することが楽しみです。	Q6-8: 私は、自分の地域の一員だと思っています。
Q3-7: 私は、行事などで達成感や喜びを感じることができます。	Q6-5: 私は、いつでもこの地域にいたいと思っています。	Q6-9: 私は、地域のひとと協力して活動することができます。
Q3-8: 私は、今のグループの一員であることに誇りを感じています。	Q6-6: 私は、地域の役に立ちたい（地域に貢献したい）と思っています。	Q6-10: 私は、地域のひとと協力して活動することができます。
Q3-9: 私は、工夫して役割に取り組むことができます。	Q6-7: 私は、地域の役に立っている（地域に貢献している）と思っています。	
Q3-10: 私は、共同作業の苦労や喜びをみんなと分かち合えることができます。	Q6-8: 私は、自分の地域の一員だと思っています。	
Q3-11: 私は、みんなとやらなければならないことに協力することができます。	Q6-9: 私は、地域のひとと協力して活動することができます。	
	Q6-10: 私は、地域のひとと協力して活動することができます。	

図 1：話し合いに関するアンケート調査（改訂版）

4. 結果と考察

(1) 結果

本研究では、話し合い活動後に記入したアンケート調査の結果を数値化し、項目別にグラフを作成した。今回は、それらの結果の内、本研究のテーマに関係した「Q6-1～5 郷土愛」「Q6-6～10 地域貢献」の 2 つを取り上げる。なお、本研究では、活動に参画した中学生 6 名（男子 A、B、C、女子 D、E、F）を対象に、4 回の話し合い活動の結果を分析している。6 名の結果は、図 2、図 3、図 4 に示している。結果は、それぞれの活動ごとに平均値で表記しており、2.0 超を「高い」、2.0 未満を「低い」と判断している。また、聞き取り調査の結果（図 5）は、書きおこした内容の内、「郷土愛」や「地域貢献」に関するものを抜粋した。

(2) 考察

考察は図 2、図 3、図 4 のグラフおよび聞き取り調査の内容を用いて行う。図 2 の太字の部分には、1 回目、2 回目と回数を重ねる中で、値が上昇した項目である。なお、中学生 6 名は初めて参画型ボランティア活動に加わったメンバーであり、実行委員会および当日の活動には中学生 6 名以外に、高校生、大学生、地域の人々が参加しており、異年齢の交流の機会が保証されていた。

1回目		9月26日											
	Q6-1	Q6-2	Q6-3	Q6-4	Q6-5	Q6-6	Q6-7	Q6-8	Q6-9	Q6-10	AVG1	AVG2	
A	2	2	1	3	0	2	1	2	1	2	1.6	1.6	
B	1	1	1	2	2	1	0	1	1	1	1.4	0.8	
C	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	1.0	1.6	
D	2	2	1	2	1	1	1	1	1	2	1.6	1.2	
E	1	1	1	2	2	1	0	1	1	1	1.4	0.8	
F	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	1.0	1.6	
2回目		9月29日											
	Q6-1	Q6-2	Q6-3	Q6-4	Q6-5	Q6-6	Q6-7	Q6-8	Q6-9	Q6-10	AVG1	AVG2	
A	2	2	1	3	1	2	1	2	1	2	1.8	1.6	
B	1	1	2	2	2	1	1	2	2	1	1.6	1.4	
C	1	1	1	1	1	2	2	2	1	2	1.0	1.8	
D	2	2	1	2	1	1	1	2	1	3	1.6	1.6	
E	2	1	2	2	2	1	1	2	2	1	1.8	1.4	
F	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	1.0	1.6	
3回目		10月8日											
	Q6-1	Q6-2	Q6-3	Q6-4	Q6-5	Q6-6	Q6-7	Q6-8	Q6-9	Q6-10	AVG1	AVG2	
A	2	2	1	3	1	2	1	2	3	2	1.8	2.0	
B	1	1	2	2	2	2	1	2	2	2	1.6	1.8	
C	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	1.2	2.0	
D	2	2	1	2	1	2	2	2	3	3	1.6	2.4	
E	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2.0	2.2	
F	2	2	2	3	1	2	2	2	2	2	2.0	2.0	
4回目		11月3日											
	Q6-1	Q6-2	Q6-3	Q6-4	Q6-5	Q6-6	Q6-7	Q6-8	Q6-9	Q6-10	AVG1	AVG2	
A	2	3	1	3	1	2	2	2	3	3	2.0	2.4	
B	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	1.8	2.0	
C	1	1	2	2	1	2	2	3	2	2	1.4	2.2	
D	2	3	1	2	1	3	2	2	3	3	1.8	2.6	
E	2	2	2	2	2	2	3	2	3	2	2.0	2.4	
F	2	2	2	3	1	2	2	2	2	2	2.0	2.0	

図2：アンケート結果（一部抜粋）

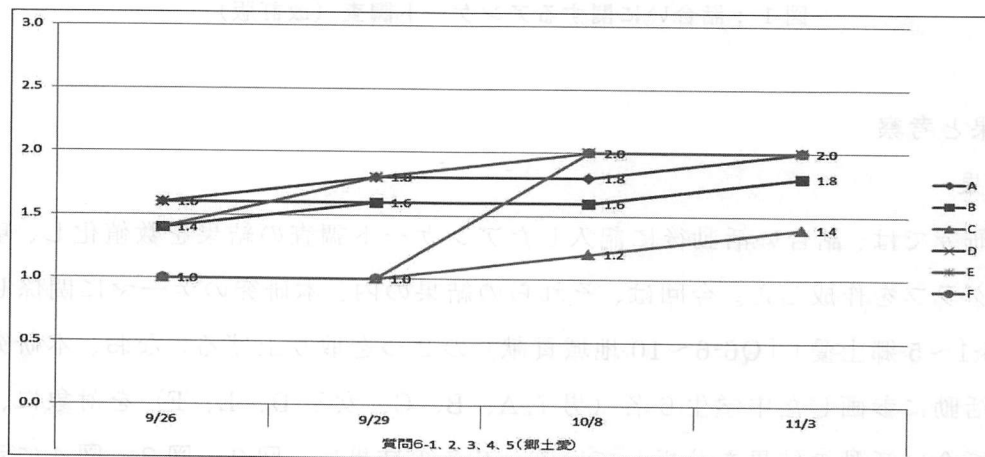


図3：郷土愛

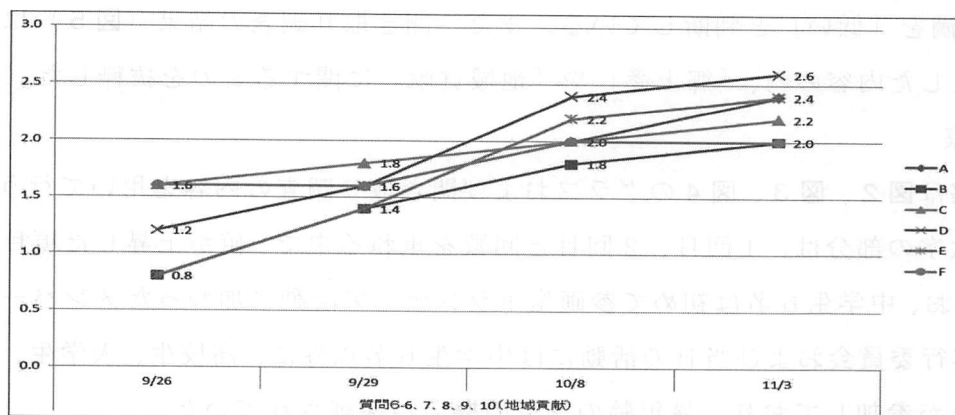


図4：地域貢献

聞き取り調査（一部抜粋）
地域の人と協力できるんだと実感した（A、D）
話合いをして活動の計画を立てている内に地域の役に立ちたいと思えるようになった（B、E）
唐櫃がもっと好きになれると思えた（F）
みんなで1つの行事を作っている感じが楽しい（C、D）
自分の地域のことを知らない自分がいることが分かった。もっと地域のことを知りたくなった。（A、C、E）
普段関わりのない先輩たちや大人のひととの関わりがあったことが新鮮で楽しかった（A、B、D、F）

図5：聞き取り調査（一部抜粋）

図3、図4をみると、郷土愛や地域貢献の値は徐々に高まっている。特に、地域貢献の値は、最初の時点（9/26）では、全員が2.0未満であったにも関わらず、活動を重ねる中で上昇している。最終的には全員が2.0超の値となっており、活動を通して、地域貢献の意識が育まれたことが伺える。

図2の郷土愛（AVG1）では、A、E、Fの3名が最終的に2.0まで値を上げているが、残りの3名については2.0未満となっている。値の低下がなかったことは評価できるが、本事例で十分に郷土愛を育むことができたかどうかには疑問が残る。郷土愛は、幼い頃から地域社会での体験や経験を積み重ねることで育まれるものであり、一朝一夕に高まるものではないと言えるだろう。しかしながら、図5の結果では、「唐櫃がもっと好きになれると思えた（F）」「もっと地域のことを知りたくなった（A、C、E）」等の郷土愛に関する内容が確認できた。これは、中学生が郷土愛を育むきっかけを提供できたことを示していると考えられる。

次に、図2から1つ1つの質問項目の結果を見ると、Q6-5「私はいつまでもこの地域にいたいと思っています」の値がほとんど上がっていないことが確認できた。これは郷土愛に関する質問であるが、やはり唐櫃台地区が、いわゆる田舎の場所であり、将来的にはより都会の地域へと出ていきたいと考える中学生が多かったのではないかとと思われる。今後、本研究のような活動をモデルケースとして参画型ボランティア活動を展開していくことで、特別活動で培った力を活かして中学生の地域貢献の意識を高めることができるだろう。

中学生は、本事例において、特別活動で育んだ力を活かして、主体的かつ積極的に話合い活動に参加した。実際の場面では、司会として話合いをまとめる中学生や書記として話合いの内容をまとめている中学生の姿を確認することができ、一人ひとりが自分の役割を果たしていた。また、中学生は話合い活動を通して、「からとの子どもたちの芸術祭」のプログラムの作成、チラシ・ポスターの作成、

幕間のイベントの決定等において重要な役割を果たした。中学生は高校生、大学生、地域の大人たちと協働し、活動を成功に導く原動力となったのである。

5. 今後の課題

本研究の目的は、中学生が特別活動で培ってきた力を活かす場として参画型ボランティア活動の実践を取り上げ、中学生が地域とのつながりを実感することで、地域に貢献する意識や郷土愛をどのように高めることができたかについて明らかにすることにあった。そして、活動を通して中学生が地域社会と関わったことで郷土を愛する気持ちを育み、地域貢献の意識を高めた様子を「話し合いに関するアンケート調査」等の結果を用いて考察してきた。

今後は、郷土を愛する気持ちを育むために活動を継続し、また中学生を対象にしたより魅力的な活動を展開していくことに努めたい。参画型ボランティア活動が、中学生の社会参画の意識を高め、主体性や自発性を育む活動として、今後さまざまな地域で実践されていくことを期待して、本研究の結びとしたい。

注記・引用文献

- 1) 兵庫県教育委員会によれば、「トライやる・ウィーク」は「中学生が職場体験、福祉体験、勤労生産活動など、地域での様々な体験活動を通じて、働くことの意義、楽しさを実感したり、社会の一員としての自覚を高めるなど、生徒一人一人が自分の生き方を見つけられるよう支援する。また、「学校・家庭・地域社会の連携を深め、社会全体で子どもたちの人間形成や社会的自立の支援を行うことで、子どもたちを中心とした地域コミュニティの構築へと発展することを期待する」という趣旨で1998年から実施されている。文部科学省「地域に学ぶ中学生・体験活動週間「トライやるウィーク」」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026/007/001/006.htm (2014年2月1日参照)
- 2) 富山県の「14歳の挑戦」、宮崎県の「地域に学ぶ体験学習」など子どもと地域の関わりを示す体験活動の事例は多い。
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編』ぎょうせい、2008年、p.63。
- 4) 「からとの子どもたちの芸術祭」は青少年育成協議会唐櫃支部によって、「唐櫃の子どもたちに地域の文化・芸術を体験させ、伝統と文化を尊重する人間性を育み、地域に対する興味関心を深める」という主旨で実施されている。
- 5) 佐々木正昭『特別活動の発達課題と評価についての研究』、平成22年～24年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）、課題番号：22531040、2013年。